RittorMusic
An impress Group Company

各　　位

2020 年 12 月 8 日
株式会社リットーミュージック

バイエル習得者でもベートーヴェンが弾けるようになるまでをサポート！クラシック・ピアノが基礎から学べる教則本『3 年後、確実にクラシック・ピアノが弾ける練習法 ベートーヴェン編』刊行

インプレスグループで音楽関連のメディア事業を手掛ける株式会社リットーミュージック（本社：東京都千代田区、代表取締役社長：松本大輔）は、『3 年後、確実にクラシック・ピアノが弾ける練習法　ベートーヴェン編』を、2020 年 12 月 17 日に発売します。

大好評のクラシック・ピアノを学べる教則本『3 年後、確実にクラシック・ピアノが弾ける練習法 ショパン編』に続き、生誕 250 周年を迎えたベートーヴェン編が登場。**ピアニストとして、また国内外の主要なコンクールで多くの受賞者を輩出しているピアノ指導者として活躍する著者の赤松林太郎氏**が、これまでに培った豊富なノウハウなどをもとに、バイエル習得者でも 3 年後にベートーヴェンが弾けるようになる練習法を解説します。"ベートーヴェンに触れよう"といった基礎から始めて、"指先のコントロール力を磨き上げる""忍耐力のある指を鍛えよう"など、大曲を弾く技術が身につくようになるまで丁寧にレッスンを進めていきます。演奏法についてはもちろん、クラシック音楽についての知識も深まる一冊です。

LESSON 1

ベートーヴェンに触れよう

"音楽の聖人"と称されるベートーヴェン。偉大な交響曲作曲家であると同時に、32曲のピアノ・ソナタをはじめ、あらゆるジャンルで多くの作品を残しました。ピアノを弾く人であれば、《エリーゼのために》に始まり、標題の付けられたソナタを自らの指で奏でてみたいと思うことでしょう。ここでは、名曲が生み出される背景を知り、ベートーヴェンの人生を振り返ってみましょう。

習得期間の目安

1~2週間

この練習の目的

- ベートーヴェンの生涯を知る
- 4つのキーワードで掘り下げる
- ベートーヴェンのさまざまな作品に触れる

生涯で3桁に及ぶ楽曲を残したベートーヴェン

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン [1770-1827] は、ケルンの選帝侯マキシミリアン・フリードリヒによって宮廷楽長を任せられたヨハン・ヴァン・ベートーヴェン [1739または1740-1792] を父に持ち、ドイツ西部のボンで生まれました。同名の祖父ルートヴィヒはボンの宮廷楽長を務めていたので、3代にわたる音楽一家ということになります。

現在ベートーヴェンの生家として観光名所にもなっている"ベートーヴェン・ハウス"は、祖父の時代からの借家で、ヨーゼフ・ハイドン [1732-1809] に学ぶためウィーンに移る1792年まで住んだ場所です。1787年に母マリア・マグダレーナが亡くなって以来、父ヨハンのアルコール依存症は深まるばかりで、ベートーヴェンは弟たちの面倒を見なければならないという家長的な自覚から、経済的にも精神的にも厳しい10代を経験しました。しかしボン時代のベートーヴェンは多くの庇護者や友人に恵まれ、やがて来たる19世紀の新しい時代に向けて、人間的にも音楽的にも成長を続けていました。

ベートーヴェンは21歳でウィーンに移り住み、56歳で亡くなるまでの35年間に、9つの交響曲をはじめ、32曲のピアノ・ソナタ、協奏曲、弦楽四重奏を含む室内楽曲など、作品番号（Op.）付きの作品だけでも3桁に及ぶ数多くの楽曲を残しました。それらは音楽史に新しい道を示すと共に、後世の芸術家たちに多大な影響を与えてきました。それゆえに"楽聖"と呼ばれて久しいですが、ベートーヴェンはこれだけの作品をどのようにして生み出してきたのでしょうか。

▲ベートーヴェンが21歳まで住んだボンの生家、通称"ベートーヴェン・ハウス"。

時代の先駆者と称された大作曲家

ベートーヴェンは18世紀の貴族的なバロック社会が終焉を迎える頃、生を受けました。古典主義的あるいは啓蒙主義的な芸術よりも感情を直接的に表現する芸術が好まれるようになり、ベートーヴェンはその1曲ずつに人生を投影するようになります。ピアノ・ソナタのジャンルだけ見ても、形式や表現領域を大幅に広げた先駆者だったので、同時代にはまったく新しい音楽として響いたことでしょう。そして"ハイリゲンシュタットの遺書"を機に、あらゆる苦悩を克服して歓喜にたどり着こうという新しい生への強い決意を抱いた彼は、ひと時も筆を休めることなく作品を書き続けました。

▲ベートーヴェン・ハウスのSchatzkammer(宝物館）と呼ばれる地下の部屋には、《ピアノ・ソナタ第14番 月光》をはじめ、多くの直筆譜が展示されている。
©Beethoven-Haus Bonn

▲30歳の頃から使い始めたと伝えられている補聴器。製作したのはメトロノームを開発したことでも知られるヨハン・メルツェル。
©Beethoven-Haus Bonn, Foto David Ertl

▲生前最後に使っていた1824年作のコンラート・グラーフ製のハンマークラヴィーア(ピアノ)。これ以前に所有していたブロードウッドより音域が広がり78鍵になった。1826年に貸与され、わずか1年ほどしか使わなかったが、鍵盤のすり減り具合から打鍵の強さが伝わってくる。
©Beethoven-Haus Bonn, Foto David Ertl

▲画家のフランツ・シュテーバーが描いたベートーヴェンの葬列の様子。葬儀は死去の3日後だったにもかかわらず、会場の三位一体教会には2万人もの人が集まり、シューベルトも棺のそばで松明を掲げた。当日は学校も閉鎖されたという。
©Beethoven-Haus Bonn

006

007

ベートーヴェンが歩んだ56年の音楽人生

故郷ボンで宮廷オルガニストとしてキャリアをスタートさせたベートーヴェンは、24歳の時にウィーンで作曲家兼ピアニストとしてデビューし、瞬く間に時の人となりました。人生の半分近くを難聴に悩まされるものの、パトロンのためではなく自身の芸術性を優先して曲作りに勤しむフリーの音楽家として活躍します。30代で遺書をしたためたあとも、《英雄》《運命》《田園》などの交響曲を精力的に作り、中期の充実した創作時期はのちに"傑作の森"と名付けられたほど。彼が歩んだ56年の音楽人生はどのようなものだったのでしょうか。

0歳 1770
12月16日（15日もしくは17日という説もあり）、ケルン大聖堂の父ヨハンと母マリア・マグダレーナの次男としてボンで生まれる。

戦後修復を繰り返して元の姿に復元されたボンのベートーヴェンの生家。直筆の楽譜や手紙、肖像画、宮廷楽士時代に演奏した弦楽四重奏の楽器など、ベートーヴェンのオリジナルの所持品が数多く展示され、音楽ホールも併設されている。

3歳 1774
この頃から父に音楽の手ほどきを受け始める。

7歳 1778
前年の祖父の死により生活が困窮。
最初の公開演奏をケルンで開催。

10歳 1781
宮廷オルガン奏者だったネーフェに師事し、対位法と通奏低音を学ぶ。

11歳 1782
最初の作品（トレスラーの行進曲による9つの変奏曲）を出版。

7歳の時、大聖堂で有名なケルンで父の息子と共に初の公開演奏会を行い、《ピアノ協奏曲》と《ピアノ三重奏曲》を披露。我が子を第二のモーツァルトとして売り出したかった教育熱心な父、そして良師に恵まれたおかげで才能が開花し、13歳で宮廷付オルガン奏者、16歳で宮廷管弦楽団のヴィオラ奏者の地位を与えられる。

16歳 1787
モーツァルトに会うために初めてウィーンを訪問。
7月に母マリア・マグダレーナが死去。

20歳 1790
12月25日、ボンへ立ち寄ったハイドンと知り合う。

21歳 1792
モーツァルトに会うために初めてウィーンを訪問。
7月に母マリア・マグダレーナが死去。

23歳 1794
11月にウィーンへ、12月にヨハン死去。

「今やまさる調律により、モーツァルトの精神をハイドンの手から受け取りたまえ」。ウィーンへの旅立ちを決めたベートーヴェンは、後援者の1人であるヴァルトシュタイン伯爵からこの名言を餞別として、ボンの温帯熱と貴族たちに送り出された。

24歳 1794
7月、ボンを訪れたハイドンと再会し、弟子入り。

25歳 1795
ハイドンが2度目のロンドン訪問へ発ったのを機に、対位法の大家ヨハン・ゲオルク・アルブレヒツベルガーに作曲の師事を始める。
自作の《ピアノ協奏曲第1番&第2番》で演奏家としてデビュー。
師ハイドンが帰ってきたのを機に、弟子入。

26歳 1796
《ピアノ・ソナタ第1番～第3番》を出版（6つのエチュード[LESSON 3]）作曲。

27歳 1798
《ピアノ・ソナタ第14番 月光[LESSON 13,14,15]》、《ピアノ・ソナタ第15番 田園》作曲。
12のコントルダンス[LESSON 4]（の第7曲）と第11曲を連結したものが、バレエ音楽（プロメテウスの創造物）終曲に使われる。

29歳 1800
《交響曲第1番》を完成させ、自身初の自主演奏会で初演。
この頃からヴェル二を教えるようになる。

30歳 1801
《ピアノ・ソナタ第19番[LESSON 3]》、《ピアノ・ソナタ第20番[LESSON 3]》、《ピアノ・ソナタ第8番 悲愴[LESSON 13,14,15]》完成。この頃から聴力の低下を自覚し始める。
ブラウ、ドレスデン、ライプツィヒ、ベルリンを巡る半年間の演奏旅行へ。

31歳 1802
《交響曲第2番》、《ピアノ・ソナタ第17番 テンペスト[LESSON 13]》を含む《3つのピアノ・ソナタ作品31》が完成。ハイリゲンシュタットへの遺書を書く。

耳の異生のため、1802年4月からウィーン郊外のハイリゲンシュタットに滞在したベートーヴェン。この年の秋には2人の弟に宛てて遺書をしたためる。その4日後にはウィーンへ戻っている。これは陸、傑作の森と呼ばれる中期の充実した創作時期がスタートした。

33歳 1804
《交響曲第3番 英雄》完成、エラール社から贈られた最新のピアノで《ピアノ・ソナタ第21番 ワルトシュタイン》を作曲。

34歳 1805
《ピアノ・ソナタ第23番 熱情[LESSON 13]》作曲。

35歳 1806
《交響曲第4番》作曲。

37歳 1808
《交響曲第5番 運命》と《交響曲第6番 田園》が初演される。

ハイリゲンシュタットの住宅地を抜けると、森の中にベートーヴェン・ボングと名付けられた散歩道がある。小川の流れるこの静かな道を歩きながら、ベートーヴェンは《交響曲第6番 田園》の構想を練り、1808年に完成させた。

38歳 1808
《交響曲第5番 運命》と《交響曲第6番 田園》が初演される。

39歳 1809
《ピアノ・協奏曲第5番 皇帝》完成。
《ピアノ・ソナタ第26番 告別》作曲。

41歳 1810
エリーゼのために[LESSON 2]をテレーゼに贈り、求婚するも断られてしまう。

46歳 1812
《交響曲第7番&第8番》完成。この頃、不滅の恋人に宛てた手紙が書かれる。
難聴の進行に対処するため、大音量のピアノの製作をシュトライヒャーに依頼。

ウィーンから南へ電車で30分ほどの距離にある温泉地バーデン。概車でも3時間ほどで着くため、ベートーヴェンは1804年から1825年まで毎年のように訪れた。宿泊先はパトロンの居城や個人宅など毎回異なっていたが、1821年から3年連続で宿泊し、《第九》の大半を作曲したお気に入りの部屋が現在は博物館になっている。

47歳 1817
ウィーン中央墓地にあるベートーヴェンの墓。最初に埋葬されたのはヴェーリング墓地だが、都市に伴い1888年に一度掘り起こされて、現在の場所に移されたメトロノーム型もしと墓の隣には、ベートーヴェンを敬愛してやまなかったシューベルトが眠っている。

48歳 1818
甥のカールと同居を始める。ブロードウッド社から6オクターブの音域を持つ最新のピアノを贈られる。難聴が悪化し、この頃から会話帳を使用するようになる。

50歳 1819
甥カールの後見人の権利を取り消される。
最終的に裁判に負けて後見人の権利を取り消される。

53歳 1821
《ピアノ・ソナタ第29番 金槌付》が初演され、大成功を収める。
この頃から長期にわたる体調不良が続く。

56歳 1824
3月26日、肝硬変のため死去。
葬儀には2万人が訪れ、シューベルトらも参列した。
ケルントナートーア劇場で《交響曲第9番 合唱付》が初演され、大成功を収める。

オススメのベートーヴェン名盤10

傑作の森が広がるベートーヴェン世界、ジャンルも多岐にわたれば、名演も古今東西に及ぶので、各人でもお気に入りのコレクションを揃えてみてください。ここでは私のお気に入りをピックアップしてみました。

01 「ベートーヴェン：交響曲第5番『運命』、ヴァイオリン協奏曲ニ長調」

●ヴィルヘルム・フルトヴェングラー(指揮)、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団、シュナイダーハン(ヴァイオリン) ●録音:1947年 ●廃盤

私たちはベートーヴェンについてすでに多くの理解を持っており、彼がどのように生きて、創作と向き合ってきたかという格闘の歳月に深い共感を寄せています。とりわけタイトル付きで知られている交響曲は意味による伝記のようなもので、《運命》はその象徴的な存在。"ジャジャジャジャーン"という運命の動機は、ナポレオン・ボナパルト率いるフランス軍がウィーンに侵略した年に書き始められました。切迫した時代だからこそ生み出された音楽。ヴィルヘルム・フルトヴェングラーとベルリン・フィルハーモニー管弦楽団のコンビは規度となく録音を残しており、中でも1947年5月27日の歴史的復帰演奏会のライブ音源は名演のひとつとして知られています。1939年の録音で見せる戦中のブレスト感は翻を潜めますが、圧倒的な高揚感はフルトヴェングラーならではのもの。

02 「ベートーヴェン：交響曲第3番『英雄』&第1番 他／シャルル・ミュンシュの芸術1000［3］」

●シャルル・ミュンシュ(指揮)、ボストン交響楽団 ●録音:1950年、1956年、1957年 ●廃盤

ベートーヴェンは《英雄》の作曲にあたり、この曲を尊敬していたナポレオンに捧げようとしていたことはよく知られた話です。しかしナポレオンが1804年に帝位につき、フランスで第1帝政を聞いたことに失望して、激怒のあまり献呈を取り下げたと伝えられています。この交響曲は演奏時間が50分に及ぶ、前代未聞の事作でもありました。英BBCが2003年に制作したテレビ映画「エロイカ」は、私的に初演された"音楽を永遠に変えた日"を綴っており、音楽と共に見応えのあるフィルムになっています。前出のフルトヴェングラーも名演を残していますが、ここではシャルル・ミュンシュとボストン交響楽団の忘れ難い演奏を取り上げます。1957年12月2日収録の《英雄》はすべてのリズムがきびきびとして、若々しい生気に溢れ、推進力に満ちています。音が全身で喜んでいるかのような最終楽章は、古い録音であることを忘れさせてくれます。

03 「ベートーヴェン：交響曲第6番『田園』、シューベルト：交響曲第5番」

●カール・ベーム(指揮)、ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団 ●録音:1971年、1979年

《田園》は《運命》と同年に完成した交響曲で、初演も共に行われたので、その対照性はいっそう際立ったに違いありません。ベートーヴェンは都会の喧騒から逃れるべく、夏になると森が広がるウィーンの郊外に出かけるのを好みました。生涯に10回以上も滞在したハイリゲンシュタットは、ベートーヴェンを訪ねる旅の聖地でもあります。"ベートーヴェンの散歩道"と名付けられた小径は、小さな川に沿った緑のトンネルになっており、水のせせらぎと共に小鳥の鳴き声がシンフォニーを奏でています。この交響曲は大いなる自然賛歌であると同時に、この地で五感がとらえたものを再現したら5枚の音画なのでしょう。全5楽章にはそれぞれ標題が付けられ、私自身この交響曲を聴くたびにさまざまな光景を思い出します。カール・ベームとウィーン・フィルハーモニー管弦楽団が1971年に残した演奏は清々しく、無邪気な木管楽器のこだまに心が洗われます。

04 「ベートーヴェン：交響曲第9番『合唱』」

●セルジウ・チェリビダッケ(指揮)、ミュンヘン・フィルハーモニー管弦楽団、ヘレン・ドーナ(ソプラノ)、ドリス・ゾッツェル(コントラルト)、ジークフリート・イェルザレム(テナー)、ペーター・リーカ(バス)、ミュンヘン・フィルハーモニー合唱団 ●録音:1989年

《第九》は私たち日本人とは切っても切れない関係にあり、年末の恒例行事にもなっています。交響曲に合唱を入れるという前代未聞の構想をベートーヴェンは長きにわたり温めていたようで、1808年に作曲した《合唱幻想曲》はその一例です。《第九》は1822年から本格的に取り組み、1824年初めに完成。晩年になってベートーヴェンは再び中期の英雄様式の理念へと戻り、そこから宇宙的な規模にまで拡大していきました。宇宙の創造を音楽で描いたような第1楽章に続き、スケルツォを第2楽章に置くという斬新さ。そのことで第3楽章の天上的な美しさが際立ち、恍惚のうちに終楽章の合唱へと導かれます。4人の独唱と合唱がオーケストラに加わり"歓喜の歌"が歌い上げられますが、シラーの詩と出会ったのはボン時代のことなので、まさにベートーヴェンの集大成ともいえるフィナーレ。多くの名盤がある中で、ここで紹介するセルジウ・チェリビダッケは決して定番ではありませんが、ミュンヘン・フィルハーモニー管弦楽団との《第九》は忘れ難いライブ録音です。

05 「ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ集」

●エミール・ギレリス(ピアノ) ●録音:1972～1985年

ドイツの偉大な作曲家としてバッハ、ベートーヴェン、ブラームスを"3大B"と呼んだハンス・フォン・ビューローは、バッハの《平均律クラヴィーア曲集》をピアノ音楽における旧約聖書、ベートーヴェンの32曲のピアノ・ソナタを新約聖書になぞらえました。ベートーヴェンの"人生ソナタ"であるピアノ・ソナタがロマン派の時代にあって聖典視されたのは、必然のことだったと言えます。爾来、ピアノ・ソナタを全曲演奏することはピアニストにとっての目標となり、最後の3曲（第30番～第32番）は大いなる高みとされるようになりました。ここではエミール・ギレリスのセットを取り上げますが、私のパリでの師フランス・クリダが師事した1人でもあります。ロシア人ならではの強靭なタッチとテクニックを持ちながらも、洗練されたセンスが放つ多彩な色彩やルバートの美しさは傑出したものも。父とよく聴いたピアノ・ソナタ第21番《ワルトシュタイン》は、私の青春でもあります。

LESSON 2 ピアノで舞曲を弾く① ドイツ舞曲

課題曲 12のドイツ舞曲 WoO.8より第1曲

レッスンはまず16小節の短い舞曲から始めましょう。それぞれの曲が求めているリズム感をつかめば、望ましいテンポが分かります。伴奏は音楽の基本を表すので、まずは左手の練習から取り組んでみるとよいです。そして右手の旋律について考えましょう。

習得期間の目安

3〜4週間

この練習の目的

- 曲の性格に合ったリズム感（舞曲感）をつかむ
- 伴奏で強拍と弱拍を表す
- 音楽の表情にふさわしい手首や指の使い方を知る

あらゆるダンスのステップの基礎となる“歩く”こと

日常生活において、“歩く”ことはほとんど無意識の行為です。何歩歩いたか、どのくらいの歩幅や速度で歩いたかなど考えもしません。しかし、運動会における行進であったり、冬の寒い朝に薄い氷が張った上を歩く時、あるいは結婚式や葬式の場であれば、“歩く”ということに必ず意識が及ぶはずです。そうした状況を思い浮かべるだけで、自分がどのような歩き方をすればよいかが容易に理解できますね。リトミックの創始者でもあるエミール・ジャック＝ダルクローズは、それこそがまさしく“リズムの意識の原点”と述べています。

歩行はあらゆるダンスのステップの基礎にもなります。ダンスは踊るものである一方で器楽曲のレパートリーにもなり、特に17世紀以降は、本来のダンスのリズムや性格は保ちつつも、それぞれの楽器の特徴を生かした様式感が確立されていきました。ダンスが隆盛を極めたバロック時代の残照のうちに生まれたベートーヴェンも、若い頃に数多くの舞曲を作曲し、やがてソナタに代表されるような大きな様式へと昇華させていきました。

ドイツ舞曲は空中で弧を描くような１小節１拍の拍子感

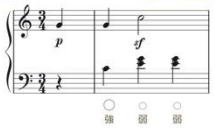
この教則本で1曲目に取り上げる作品はドイツ舞曲です。モーツァルトの有名な歌劇《ドン・ジョヴァンニ》では、ドン・オッターヴィオとドンナ・アンナという貴族のペアがメヌエット（フランス由来の宮廷舞曲）を踊るのに対して、レポレッロとマゼットという平民のペアがドイツ舞曲を踊ってみせます。優雅で高貴なジェスチャーが求められるメヌエットとは対極にある、大衆的で快活なドイツ舞曲。テンポに関する表示はありませんが、その性格を考えると、メヌエットよりは速めで、空中で弧を描くような1小節1拍の拍子感が適切です。まずはその拍子感を左手で表現することから始めましょう。

デュナーミクが明確なほどリズム感が鮮やかに

ドイツ舞曲は4分の3拍子で書かれており、つまりは3拍子です。拍には強弱があり、そのデュナーミクが明確であるほどリズム感が鮮やかになります。デュナーミクとは、強弱によって音楽に表情をつける方法のこと。この曲では1拍目が強拍であるのに対して、2・3拍目は弱拍になります（譜例1）。1拍目が軽やかに跳ねることによって、2・3拍目が空中で回っているようなイメージを引き出すことができます。しかしピアノを習い始めの人ほど、最初の音で鍵盤を押さえつけるように手首を下げてしまい、1拍目がドスンと尻もちをついたような音の表情になってしまいます。すると2・3拍目もそのまま重さのかかったタッチになってしまい、躍動感が失われてしまいます。

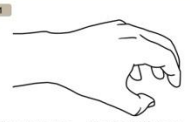
図1はピアノを弾く基本的な指の形です。1拍目を弾く時、あらかじめ2拍目の和音をつかむように指先を作っておくと、ちょうど卵を持つ時のような握力が働いて、5の指が跳躍しやすくなります。指先に軽く力が入っていることによって、タッチ感のコントロールが可能になります。すると、2・3拍目の和音を軽いタッチで揃えて響かせることができます。無意識に手首を下げてしまう癖は、後々まで悪影響を及ぼすので、まず気をつけてほしいことです。

譜例1 冒頭1小節　CD TRACK 01



付録CDには左手だけ収録しています。

図1



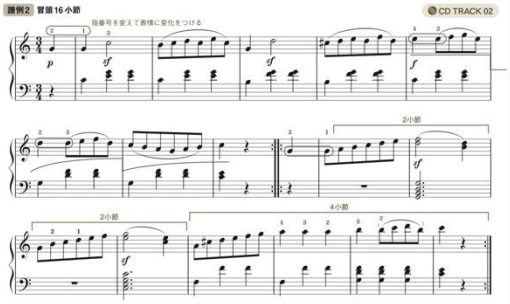
卵をつかむようなフォームが、ピアノを弾く時の基本的な指の形です。弾く時は手首を下げないように。

同音が続く時は指番号によって表情を変えて

次は、メロディを担当する右手について考えていきましょう。この曲はアウフタクトから始まります（譜例1）。アウフタクトはいわゆる裏拍なので、アウフタクトのG音（ソ）と1拍目のG音は同じ重さであってはいけません。同音が続く時に音の表情が同じにならないように、次ページの譜例2のように指番号を変える工夫が必要です。

そして音楽は*sf*が付けられている2分音符へとエネルギーが向けられます。今回のような古典派の作品から音量記号が明記されるようになるので、楽譜の指示を守ることが大切です。音価（音の長さ）が大きい音符であればなおさらのこと。欲しい音を十分に響かせるためには、腕の重みを指にしっかりと乗せる必要があります。図2のように、タッチと同時に手首をローリングさせると、手首の落下と共に上腕の重さが指先に伝わる仕組みになっています。*sf*の打鍵の勢いと共に水中に飛び込み、2分音符の長さをかけて浮上してくるイメージを手首で表してみてください。

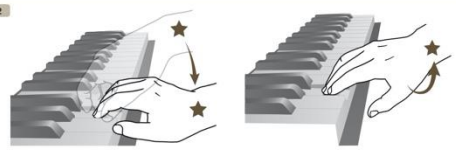
譜例2 冒頭16小節　CD TRACK 02



付録CDには最後の4小節間だけ収録しています

※当時は同音を同じ指番号で弾くのが主でしたが、今日のピアノでは指使いを変える方が好ましい

図2



❶打鍵と同時に手首をローリングさせましょう。

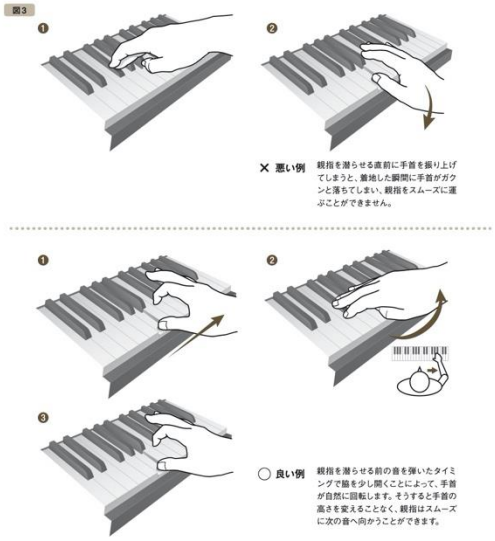
❷手首が下がったところでグッーっと回すと、落下と共に上腕の重さが指先に伝わり、重みをかけたことで手首がフワッと上がります。

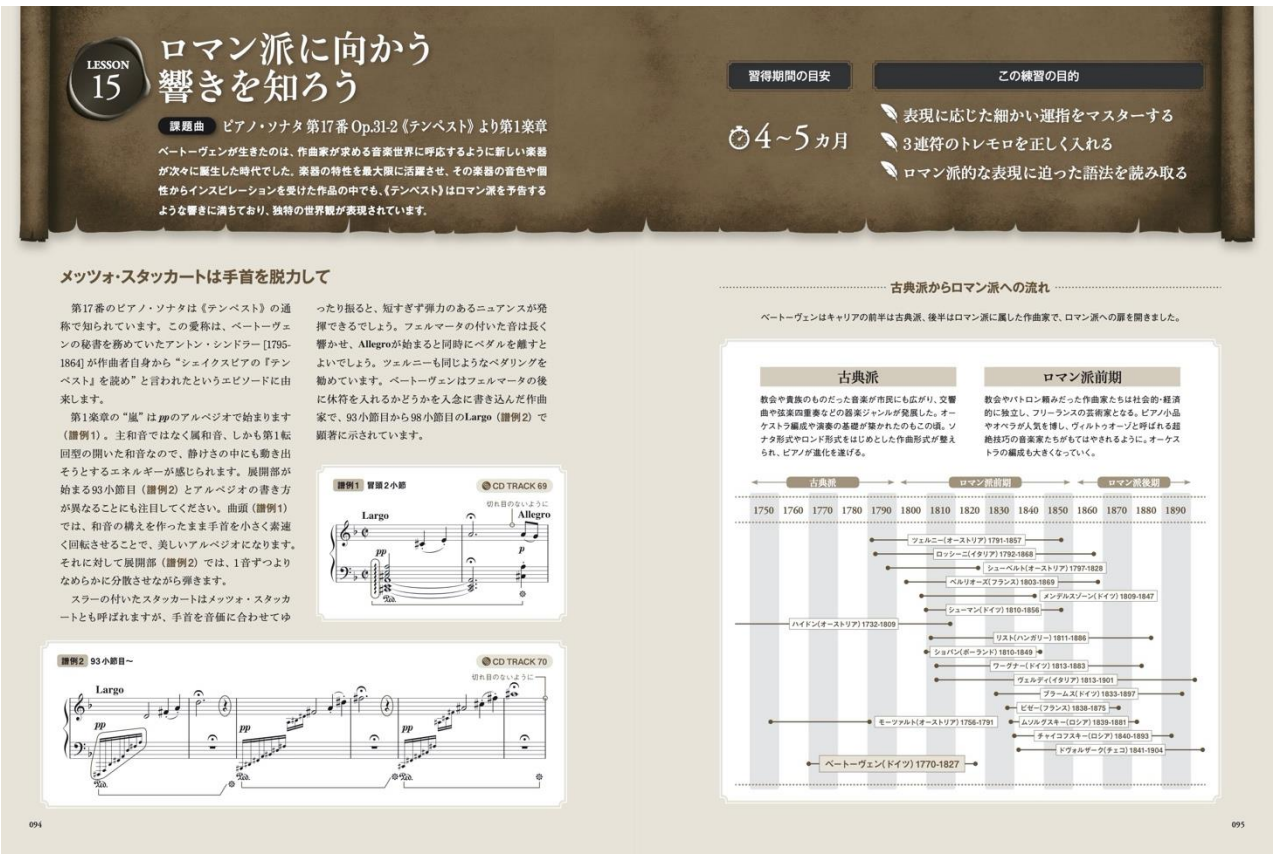
音型に応じてデュナーミクを設計

音型の上行・下行は、音楽が向かいたい方向を示してくれます。この曲の前半部では、5小節目のG音が最高音になります（譜例2）。*p*から*f*に至る4小節間で階段を上り、5小節目から下りていくようなデュナーミクを設計するとよいでしょう。音量の増減を表す時、ヘアピン型の＜ ＞はアーティキュレーションを作るのに適していますが、大きなフレーズを作る際はテラス型┌──┘で実践するのがベストです。譜例を参考にしてみましょう。

後半部は2小節＋2小節＋4小節という構成になっており、一番広い4小節の楽節で音楽がクライマックスを迎えます。音型を見れば明らかですが、それぞれの楽節が1つずつ山を作っています。ここでは山を昇るのに跳躍ではなくスケールが用いられているので、滑らかに弾けるように1の指でアクシデントを起こさないようにしましょう。クライマックスの弾き方は付録CDの音源を参考に、親指の潜らせ方については図3で良い例と悪い例を示しましたので、自分の指の運び方をよくチェックしてみてください。

図3





LESSON 15

ロマン派に向かう響きを知ろう

課題曲 ピアノ・ソナタ 第17番 Op.31-2《テンペスト》より第1楽章

ベートーヴェンが生きたのは、作曲家が求める音楽世界に呼応するように新しい楽器が次々に誕生した時代でした。楽器の特性を最大限に活躍させ、その楽器の音色や個性からインスピレーションを受けた作品の中でも、《テンペスト》はロマン派を予告するような響きに満ちており、独特の世界観が表現されています。

習得期間の目安

4~5カ月

この練習の目的

- 表現に応じた細かい運指をマスターする
- 3連符のトレモロを正しく入れる
- ロマン派的な表現に迫った語法を読み取る

メッツォ・スタッカートは手首を脱力して

第17番のピアノ・ソナタは《テンペスト》の通称で知られています。この愛称は、ベートーヴェンの秘書を務めていたアントン・シンドラー[1795-1864]が作曲者自身から“シェイクスピアの『テンペスト』を読め”と言われたというエピソードに由来します。

第1楽章の“嵐”は*pp*のアルペジオで始まります（譜例1）。主和音ではなく属和音、しかも第1転回型の開いた和音なので、静けさの中にも動き出そうとするエネルギーが感じられます。展開部が始まる93小節目（譜例2）とアルペジオの書き方が異なることにも注目してください。曲頭（譜例1）では、和音の構えを作ったまま手首を小さく素速く回転させることで、美しいアルペジオになります。それに対して展開部（譜例2）では、1音ずつよりなめらかに分散させながら弾きます。

スラーの付いたスタッカートはメッツォ・スタッカートとも呼ばれますが、手首を音価に合わせてゆったり振ると、短すぎず弾力のあるニュアンスが発揮できるでしょう。フェルマータの付いた音は長く響かせ、Allegroが始まると同時にペダルを離すとよいでしょう。ツェルニーも同じようなペダリングを勧めています。ベートーヴェンはフェルマータの後に休符を入れるかどうかを入念に書き込んだ作曲家で、93小節目から98小節目のLargo（譜例2）で顕著に示されています。

譜例1 冒頭2小節 CD TRACK 69

譜例2 93小節目～ CD TRACK 70

古典派からロマン派への流れ

ベートーヴェンはキャリアの前半は古典派、後半はロマン派に属した作曲家で、ロマン派への扉を開きました。

古典派

教会や貴族のものだった音楽が市民にも広がり、交響曲や弦楽四重奏などの器楽ジャンルが発展した。オーケストラ編成や演奏の基礎が築かれたのもこの頃。ソナタ形式やロンド形式をはじめとした作曲形式が整えられ、ピアノが進化を遂げる。

ロマン派前期

教会やパトロン頼みだった作曲家たちは社会的・経済的に独立し、フリーランスの芸術家となる。ピアノ小品やオペラが人気を博し、ヴィルトゥオーゾと呼ばれる超絶技巧の音楽家たちがもてはやされるように。オーケストラの編成も大きくなっていく。

古典派 ロマン派前期 ロマン派後期

1750 1760 1770 1780 1790 1800 1810 1820 1830 1840 1850 1860 1870 1880 1890

ツェルニー(オーストリア) 1791-1857
ロッシーニ(イタリア) 1792-1868
シューベルト(オーストリア) 1797-1828
ベルリオーズ(フランス) 1803-1869
メンデルスゾーン(ドイツ) 1809-1847
シューマン(ドイツ) 1810-1856
ハイドン(オーストリア) 1732-1809
リスト(ハンガリー) 1811-1886
ショパン(ポーランド) 1810-1849
ワーグナー(ドイツ) 1813-1883
ヴェルディ(イタリア) 1813-1901
ブラームス(ドイツ) 1833-1897
ビゼー(フランス) 1838-1875
モーツァルト(オーストリア) 1756-1791
ムソルグスキー(ロシア) 1839-1881
チャイコフスキー(ロシア) 1840-1893
ドヴォルザーク(チェコ) 1841-1904
ベートーヴェン(ドイツ) 1770-1827

094 095

■書誌情報

書名：『3 年後、確実にクラシック・ピアノが弾ける練習法　ベートーヴェン編』

著者：赤松林太郎

定価：本体 2,500 円＋税

発売：2020 年 12 月 17 日

発行：リットーミュージック

商品情報ページ　https://www.rittor-music.co.jp/product/detail/3119226002/

CONTENTS

■Lesson1ベートーヴェンに触れよう
・ベートーヴェンの生涯を知る／4つのキーワードで掘り下げる／ベートーヴェンのさまざまな作品に触れる

■Lesson2：ピアノで舞曲を弾く①ドイツ舞曲　課題曲「12のドイツ舞曲WoO.8より第1曲」
・曲の性格に適ったリズム感（舞曲感）をつかむ／伴奏で強拍と弱拍を表す／音楽の表情にふさわしい手首や指の使い方を知る

■Lesson3：ピアノで舞曲を弾く②メヌエット　課題曲「6つのメヌエットWoO.10より第2曲」
・メヌエットに親しむ／和音による旋律を美しく立体的に弾く／アーティキュレーションを表すための手首の使い方を知る

■Lesson4：ピアノで舞曲を弾く③コントルダンス 課題曲「12のコントルダンスWoO.14より第1番、第7番」
・さまざまな伴奏形に対応する／左手で跳躍形を弾くコツをつかむ／fやffを豊かに響かせる

■Lesson5：ピアノで表情を作る 課題曲「ソナチネ ヘ長調より第1楽章」
・フィンガーペダルを効果的に用いる／スラーが示すアーティキレーションを音楽的にとらえる／ディナーミク（音量）の作り方を考える

■Lesson6：憧れの名曲を弾こう 課題曲「エリーゼのために WoO.59」
・美しいアルペジオを弾く／速いパッセージを軽やかに弾く／ペダルの基本的な使い方を身につける

■Lesson7：ソナタ形式を知る 課題曲「ピアノ・ソナタ 第20番Op.49-2より第1楽章」
・ソナタ形式の成り立ちと構造を知る／楽譜を読むテクニックを学ぶ／読譜をもとに多彩な表現を用いる

■Lesson8：ロンド形式を知る 課題曲「ピアノ・ソナタ 第19番Op.49-1より第2楽章」
・正しい拍節感で音楽を開始する／曲想に合うスタッカートを表現する／フィンガーペダルを効果的に用いる

■Lesson9：3大ソナタに挑もう 課題曲「ピアノ・ソナタ 第8番Op.13《悲愴》より第1楽章」
・調性の変化をとらえる／リズムやアーティキレーション、強弱から物語を感じる／ベートーヴェンを特徴づけるffやsfを表現する

■Lesson10：ピアノを歌わせる 課題曲「ピアノ・ソナタ 第8番Op.13《悲愴》より第2楽章」
・アゴーギグを身につける／和音の連打を美しく弾く／レガートを徹底するための奏法とペダリングをマスターする

■Lesson11：疾風怒涛の作風をとらえよう 課題曲「ピアノ・ソナタ 第8番Op.13《悲愴》より第3楽章」
・スラーによる拍節感をとらえる／オーケストレーションから音質を考える／劇的な表現を読み取る技術を学ぶ

■Lesson12：幻想的な響きを求めよう 課題曲「ピアノ・ソナタ 第14番Op.27-2《月光》より第1楽章」
・美しいレガートを作るペダリングを身につける／和声のはたらきを感じる／メロディラインを弾く指を保続する

■Lesson13：指先のコントロール力を磨き上げる 課題曲「ピアノ・ソナタ 第14番Op.27-2《月光》より第2楽章」
・指先のコントロール方法を知る／ユニゾンや対旋律、多声部をバランス良く響かせる／指を保持しながら和音進行を作る

■Lesson14：忍耐力のある指を鍛えよう 課題曲「ピアノ・ソナタ 第14番Op.27-2《月光》より第3楽章」
・音ミスタッチなくアルペジオのパッセージを弾く／瞬時に音量をコントロールする／大胆なペダリングを駆使する

■Lesson15：ロマン派に向かう響きを知ろう 課題曲「ピアノ・ソナタ 第17番Op.31-2《テンペスト》より第1楽章」
・表現に応じた細かい運指をマスターする／3連符のトレモロを正しく入れる／ロマン派的な表現に迫った語法を読み取る

■Lesson16：大曲に挑戦しよう 課題曲「ピアノ・ソナタ 第23番Op.57《熱情》より第1楽章」
・構成をとらえて場面ごとの表現を模索する／これまでに習得した技術や強靭性を発揮する／ロマン派的な表現に迫った語法を読み取る

PROFILE

赤松 林太郎（あかまつ りんたろう）

1978 年大分に生まれ、2 歳よりピアノとヴァイオリンを、6 歳よりチェロを始める。1990 年全日本学生音楽コンクールで優勝して以来、国内の主要なコンクールで優勝を重ねる。世界的音楽評論家ヨアヒム・カイザーにドイツ国営第 2 テレビにて「聡明かつ才能がある」と評された 2000 年のクララ・シューマン国際ピアノコンクール受賞がきっかけとなり、本格的にピアニストとして活動を始める。神戸大学を卒業後、パリ・エコール・ノルマル音楽院にてピアノ・室内楽共に高等演奏家課程ディプロムを審査員満場一致で取得（室内楽は全審査員満点による）。国内はもとよりアジアやヨーロッパでの公演も多く、2016 年

よりハンガリーのダヌビア・タレンツ国際音楽コンクールでは審査委員長を務め、ヨーロッパ各国で国際コンクールやマスタークラスに度々招かれている。キングインターナショナルよりアルバムを次々リリースする一方、新聞や雑誌への執筆も多く、著書に『赤松林太郎 虹のように』（道和書院）、『3 年後、確実にクラシック・ピアノが弾ける練習法 ショパン編』（リットーミュージック）、『徹底解説 バッハ〈インヴェンション＆シンフォニア〉弾き方教え方』（音楽之友社）がある。洗足学園音楽大学客員教授、大阪音楽大学特任准教授、宇都宮短期大学客員教授、ブダペスト国際ピアノマスタークラス教授、（一社）全日本ピアノ指導者協会評議員、カシオ計算機株式会社アンバサダー。

◎http://rintaro-akamatsu.com/

【株式会社リットーミュージック】https://www.rittor-music.co.jp/
『ギター・マガジン』『サウンド＆レコーディング・マガジン』等の楽器演奏や音楽制作を行うプレイヤー＆クリエイター向け専門雑誌、楽器教則本等の出版に加え、電子出版、映像・音源の配信等、音楽関連のメディア＆コンテンツ事業を展開しています。新しく誕生した多目的スペース「御茶ノ水 Rittor Base」の運営のほか、国内最大級の楽器マーケットプレイス『デジマート』やエンタメ情報サイト『耳マン』、T シャツのオンデマンド販売サイト『TOD』等の Web サービスも人気です。

【インプレスグループ】https://www.impressholdings.com/
株式会社インプレスホールディングス（本社：東京都千代田区、代表取締役：松本大輔、証券コード：東証 1 部 9479）を持株会社とするメディアグループ。「IT」「音楽」「デザイン」「山岳・自然」「モバイルサービス」「学術・理工学」「旅・鉄道」を主要テーマに専門性の高いメデイア&サービスおよびソリューション事業を展開しています。さらに、コンテンツビジネスのプラットフォーム開発・運営も手がけています。

以上

【本件に関するお問合せ先】
株式会社リットーミュージック　広報担当　吉田（勇）、原見
Tel: 03-6837-4704 / E-mail: pr@rittor-music.co.jp